

江戸幕府による蝦夷地直轄」について(3)

江戸幕府は、「クナシリ・メナシの戦い」（寛政元年、1789）以来途絶えていたアイヌ民族との交易について、幕府が直に模範的な

て500人の兵を二厩より
箱館に渡らせるなど、緊張
が高まつてきました。

願いよりはしづかの動きが、寛政元年の秋頃から顕著になつてきました。

辺（和人地）の「百姓（漁民）共」が「困窮」しているので、「両家御取上」のうえ、「既前之通江差・箱館両浜」組の町人に「御渡下さい」というものでした。

「これに対し松前藩の答ふは、両家を追放することに

801頃)から、荒巻と称して薄塙で移出され、これが好まれたため各地で生産されました。荒巻は塙引に次ぐ產物となり、江戸に多く移出されました。

鱈も、塙引以外に粕や油が有数の產物になります。

交易を蝦夷地の数か所で実施し、アイヌの人々との関係が良好になりました。また、幕府は、同時に千島・樺太の状況も調査しました。この結果、松前藩の不取締りが明らかになり、同時に、ロシア人が樺太に渡来する事実も知れました。さらに、外国船の来航も相次いだため、幕府は外国船に備え、寛政10年（1798）正月、津軽藩に命じ

戦い」の後、最有力商人となつた阿部屋村山伝兵衛でしたが、その没落も早かつた。伝兵衛は多額の金を松前藩に貸し付ける「金主」であり、藩からの信頼を得ていたにも関わらず、このような事になつたのは、松前藩の経済政策の危うさの表れでもありました。

そして、秋の鮭漁も凶漁となるなど、さうに生活が悪化したので、寛政2年12月、熊石村から石崎村に至る人々が徒党して福山方面に押し寄せてきました。江良町村へは1800人余りが、清部村へは500人が到達しました。藩主道廣（寛政4年に隠居）は怒り、自ら出馬してこれを鎮めようとしたが、叔父の松前廣長（つばなひろまさ）に諫められ、果

よる、両家に対する藩の借金について、それを肩代わりするだけの資金が百姓や両浜組りょうはんぐみにあるのかと質したので、この問題はそのまま棚上げたなげになり、暴動は鎮おさめられたとされています。

また、寛政2年から蝦夷えぞ地での大網は禁止されましたが、鮭の不漁は変わらずの大網の使用と江差地方の鮭漁については、無関係であることが明らかになつた

昆布・鱈・鮑・海鼠

昆布は、絶品を「御上り
昆布」とい、汐首崎から
東シカベ産とされ、長崎交
易品には、志者村付近に産
する「志者昆布」が使われ
ました。これに次ぐ「三石
昆布」は、次第にその価値
を高めつつありました。

鮈は干した「棒鮈」が主
でしたが、この頃、腸を抜
いて（ツボヌキ）塩漬した

鮓漁（大網騒動）

まで入りました。

1783 頃からは江差地
方が薄漁となつたので、漁
民は追鮓（鮭漁のため蝦夷
地に赴く事）として西蝦夷
地（日本海側のアイヌ地）
に出漁し、瀬田内より歌棄

漁民らは、江差地方が薄漁となつたのは、場所請負人が蝦夷地（アイヌ地）で大網おおあみを使用して鱈ますのりその他雑魚を漁し、魚油を搾り、粕かすを製造したのが原因だとして、大網使用の禁止を憲けんとしている。

和田郡司らを派遣しました
が、徒党の者は、藩吏は信
用できないとして、仲介の
僧侶に取次ぎを依頼し、願
書を託しました。

この頃から、和人地に近い蝦夷地でも薄漁となつたので、漁民は石狩まで入漁することを請願し、許されました。

鮑は、これまでには色が黒く串に刺したものでしたが、長崎交易品となつた後は、煮て塩を振り広げて干した「白干鮑」としました。

海鼠も、網の普及と「煎り海鼠」が長崎交易品となり、生産を増加させました。

鮭
・
鱒漁